

第51回 日本血液浄化技術学会学術集会

テナパノル塩酸塩の長期投与による 排便と血清リン濃度の影響

医療法人いつき会 法人本部 透析事業推進部

日時：2025年4月13日（日）14:54～
場所：ウインクあいち 第3会場



2025年4月13日（日）
第51回日本血液浄化技術学会学術集会・総会

COI開示

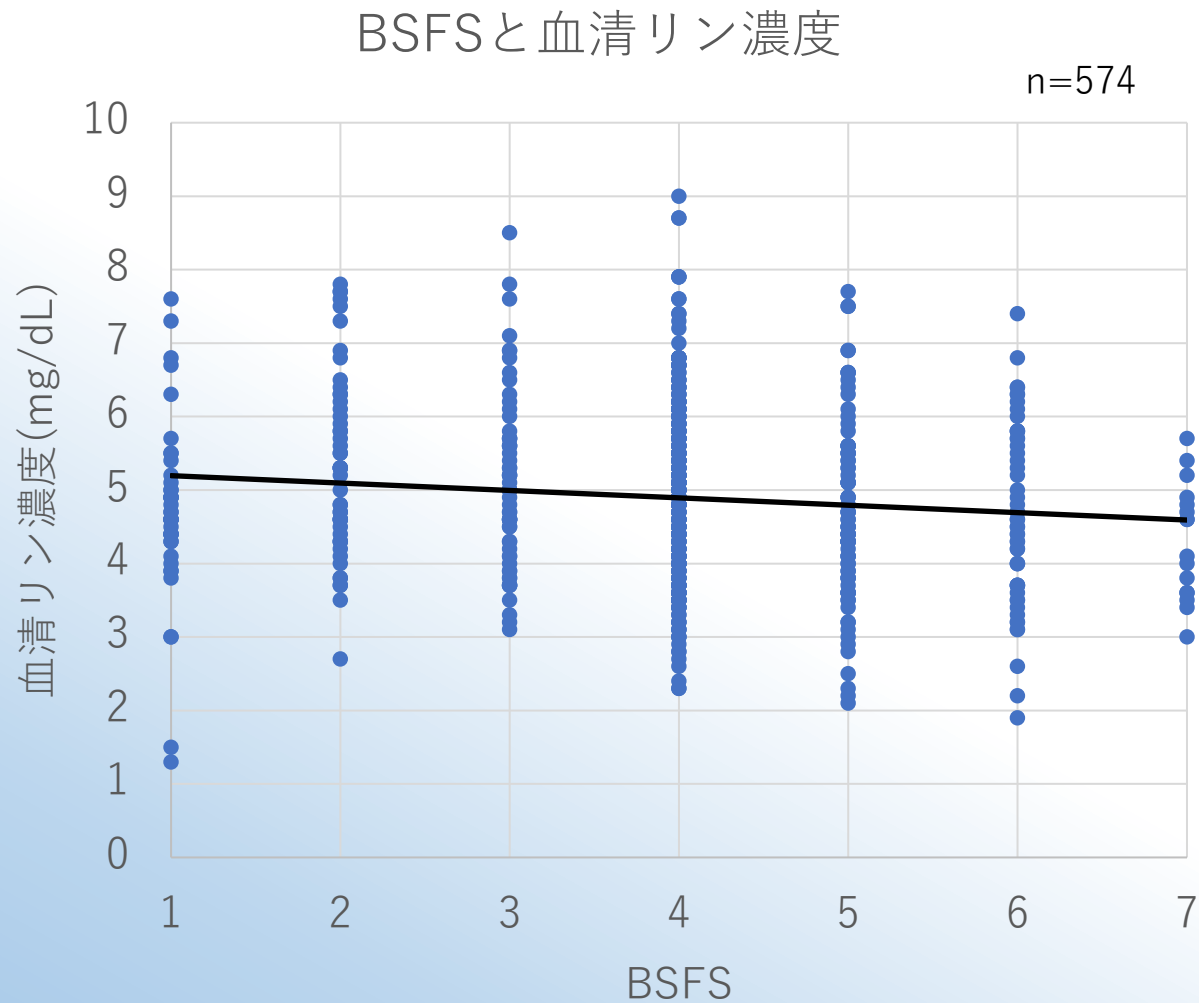
筆頭発表者名：○○○○

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

本研究の背景のデータ

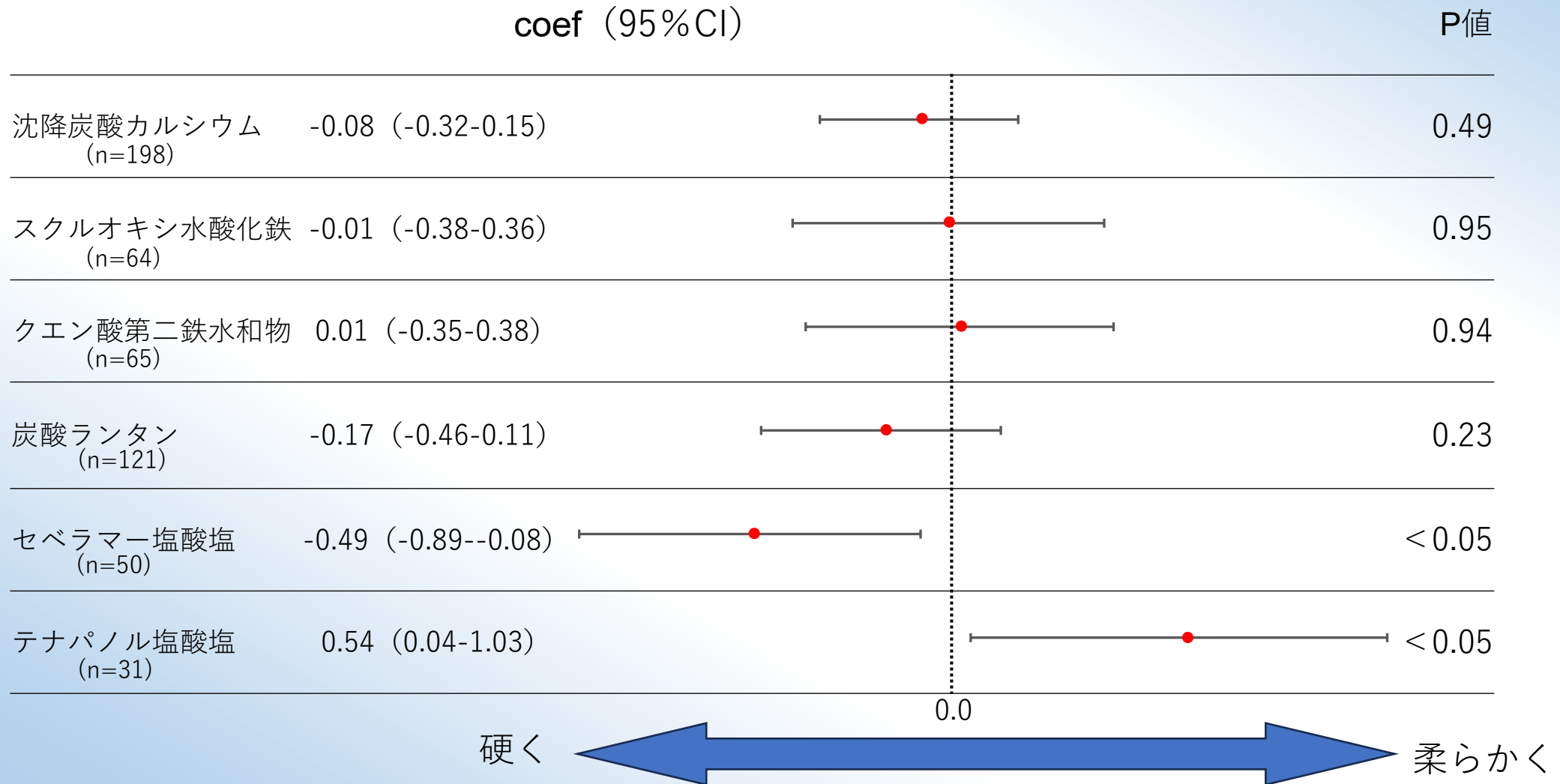
- ①対象：2法人5施設の慢性維持血液透析患者
- ②調査項目：ブリストル便形状スケール（以下BSFS）、血清リン濃度、リン低下薬を調査
- ③単線形回帰分析にて分析した。統計アプリケーションにはEzR(ver.1.61)を用いた。
- ④「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針ガイダンス（文部科学省・厚生労働省・経済産業省）」を基に、匿名化データを使用し、倫理指針を遵守の上、学術目的に限り活用します。

対象患者数は、574名であった。
BSFSの平均は 3.91 ± 1.37



coef	95%CI	P値
-0.101	(-0.174- -0.027)	0.007

BSFSの変化



目 的

透析患者の高リン血症治療では、リン低下薬の多剤併用や慢性的な便秘が課題となり、治療継続や予後に影響を及ぼす。

特に、テナパノル塩酸塩は、腸管でのリン吸収を抑制し、便秘改善効果も期待される。

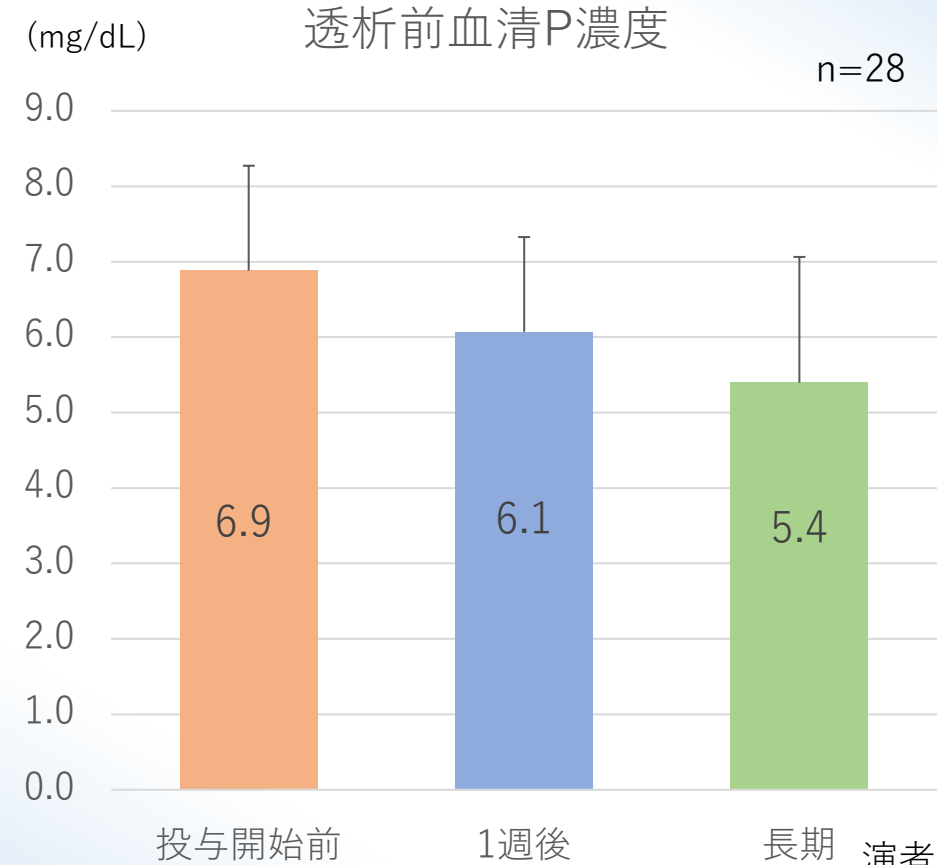
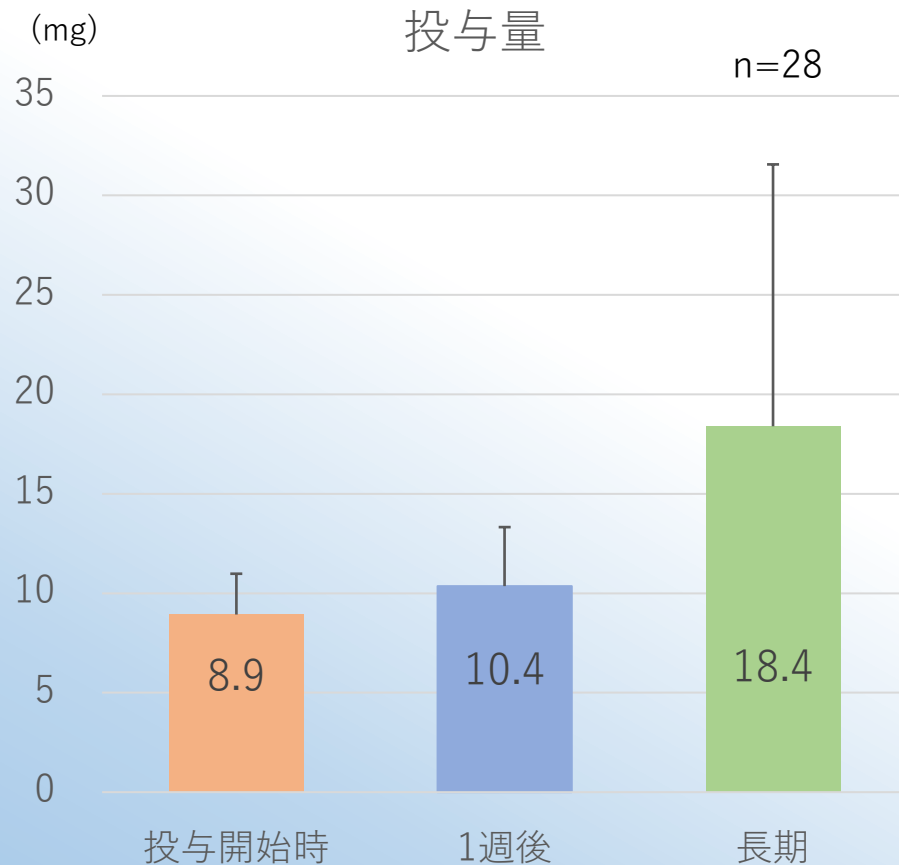
本研究では、長期継続投与が可能であった症例を対象に、排便パターンの変化や便秘改善の有無を評価し、治療の継続性や高リン血症管理への貢献度を検証する。

方 法

- ①対象：テナパノル塩酸塩が投与開始となった慢性維持血液透析患者
- ②調査項目：便秘の有無、投与量、透析前血清リン濃度、BSFS、リン低下薬
- ③投与開始時、1週後、長期（3か月以上）において各調査項目を従属変数とした回帰分析を行った。統計アプリケーションにはEzR(ver.1.61)を用いた。
- ④「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針ガイドンス（文部科学省・厚生労働省・経済産業省）」を基に、匿名化データを使用し、倫理指針を遵守の上、学術目的に限り活用します。

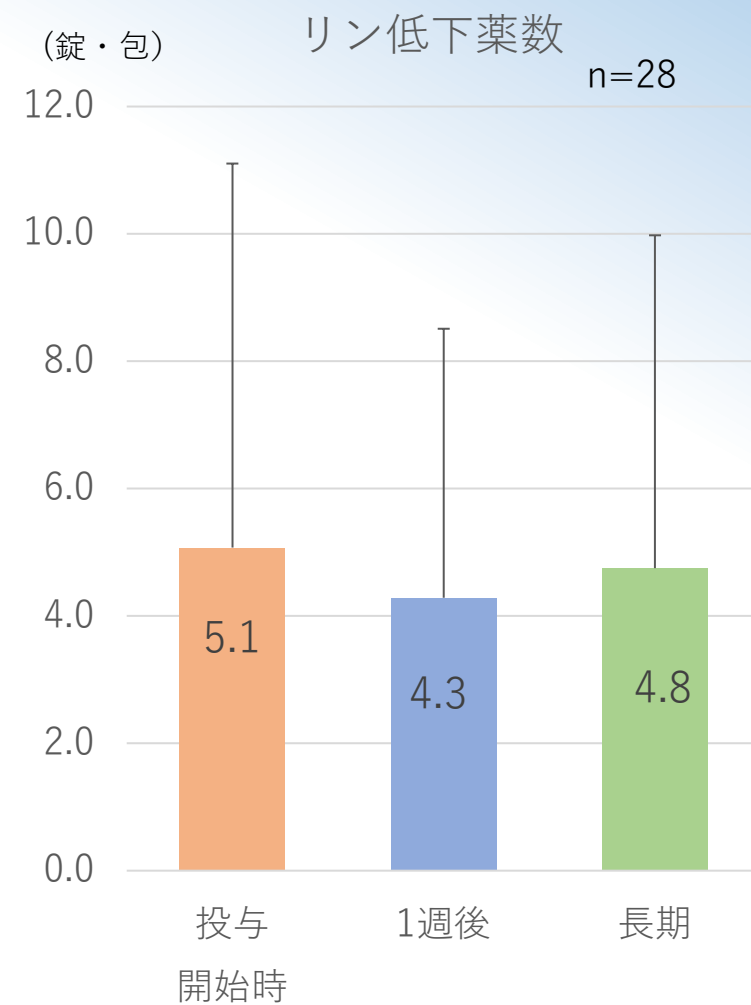
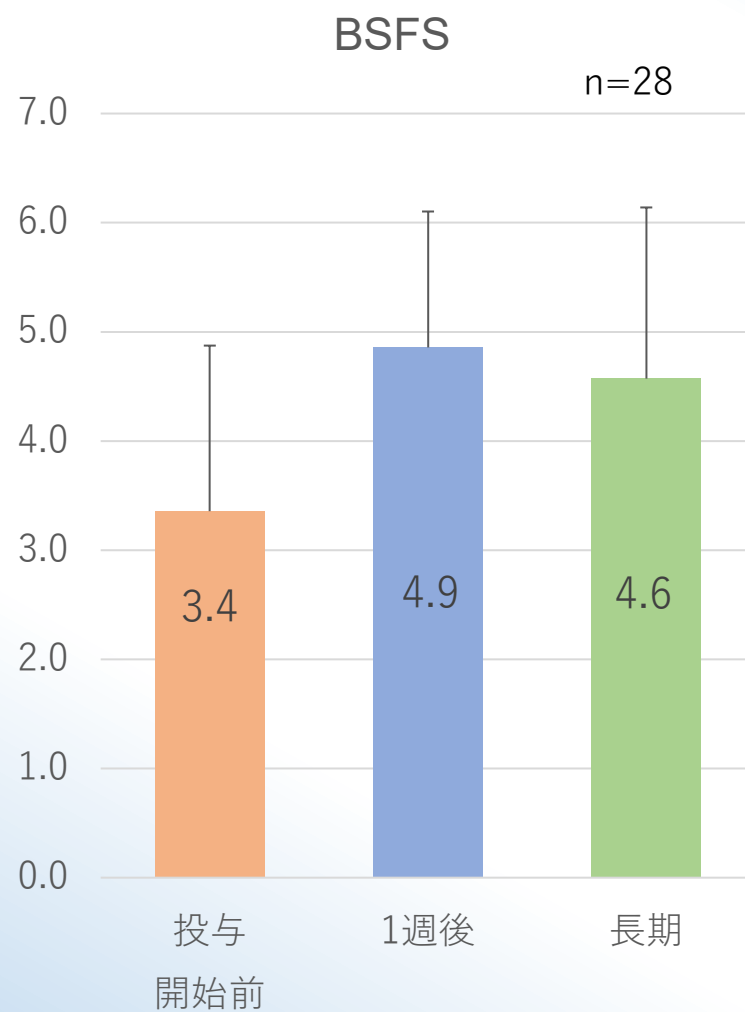
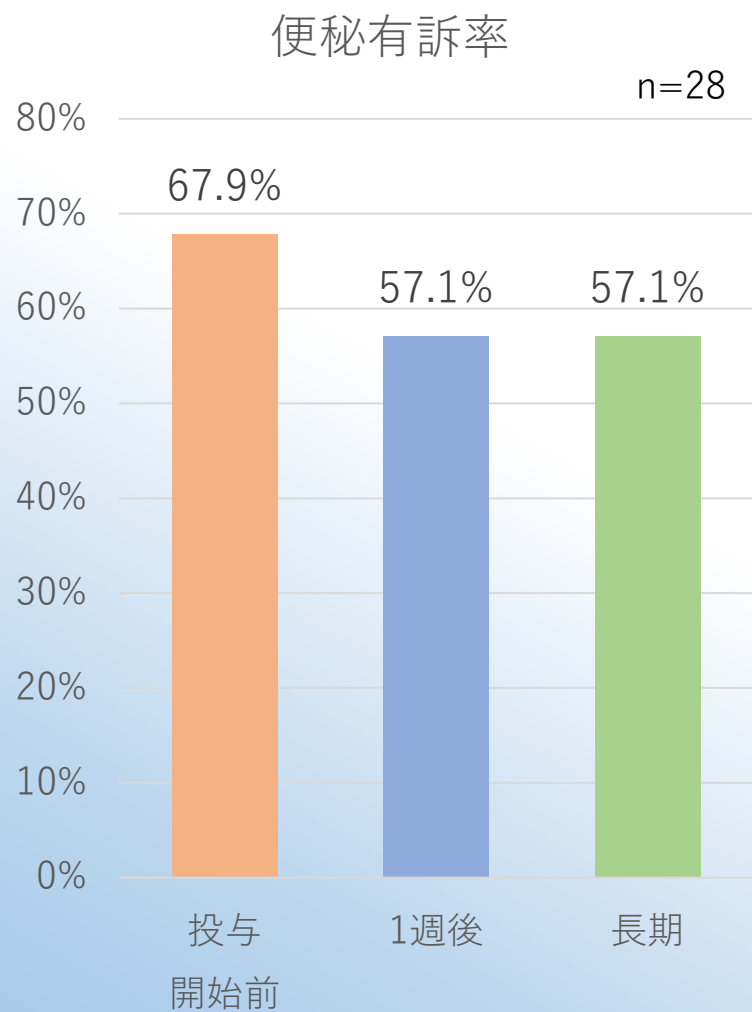
結 果

テナパノル塩酸塩が開始となった患者は40名であった。
そのうち12名は下痢や悪心により1週間以内に中止となった。

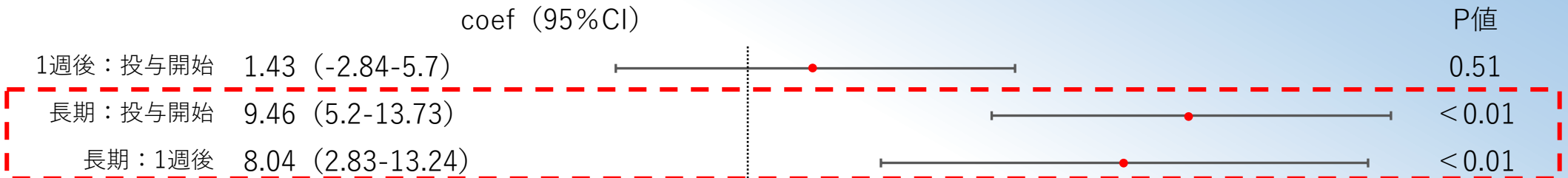


演者作成

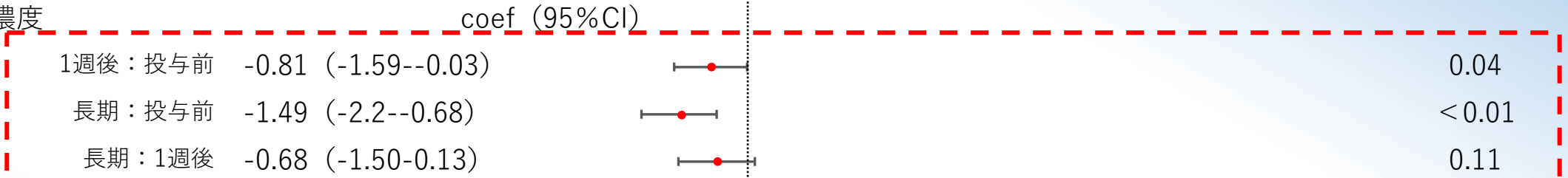
結 果



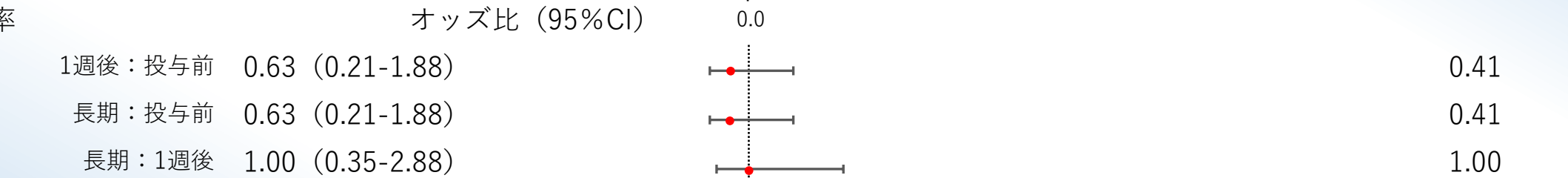
投与量



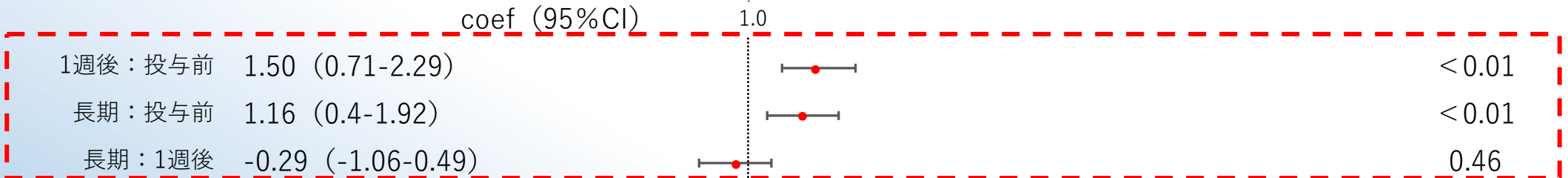
血清リン濃度



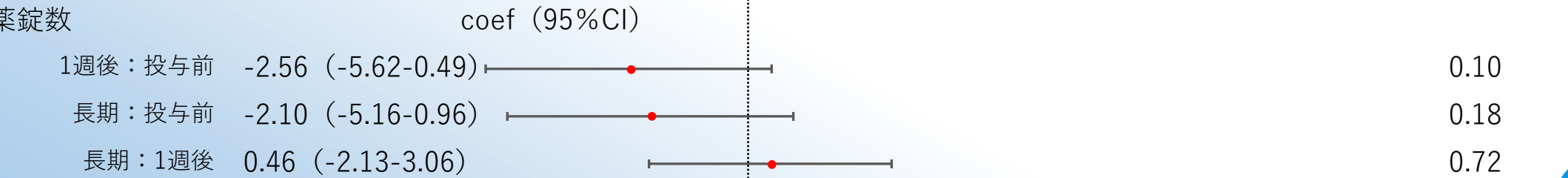
便秘有訴率



BSFS



リン低下薬錠数



考 察

テナパノル塩酸塩の投与により、便秘の有訴率に有意差は見られなかったが、BSFSの上昇から排便困難感の軽減が示唆された。

テナパノル塩酸塩の投与量を増やしてもBSFSに変化はなく、下痢の悪化も認められなかった。

また、同剤を追加で開始してもリン低下薬の量（錠数・包数）は増加しなかった。

結 語

テナパノル塩酸塩の長期投与患者では増量によって下痢を悪化させることなく、リン低下薬を増加せずに血清リン濃度を低下させることが可能であると考えられる。